



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	マルクス『機械論草稿』の執筆時期について:内田弘氏の拙論批判への回答
Author(s)	吉田, 文和
Citation	経済學研究, 35(3), 126-135
Issue Date	1986-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31711
Type	departmental bulletin paper
File Information	35(3)_P126-135.pdf



マルクス『機械論草稿』の執筆時期について

—— 内田弘氏の拙論批判への回答 ——

吉 田 文 和

はじめに

私はこの間「マルクス機械論形成史研究」の一環として、マルクス『1861-1863年草稿』中の『機械論草稿』の理論的水準を確定するために、その執筆時期につき独自に検討をつづけ、新MEGA編集部の見解を批判し、同じ『1861-1863年草稿』に含まれる『剰余価値学説史』が全体として『機械論草稿』に先行すると主張してきた¹⁾。

幸い私見は、新MEGA編集部²⁾はもとより国内外から大きな反響をよんだが、なかでも内田弘氏より長文にわたる本格的な批判³⁾をいた

だいた。そこでこの問題のいっそうの学問的検討をねがうものとして、内田氏からよせられた批判にたいする回答を示すことにしたい。

I. 「b. 分業」から「第3章 資本と利潤」へというシェーマは成り立つか？

内田氏は今回の拙論批判において、氏自身の積極的見解として、マルクス『1861-1863年草稿』は、「b. 分業」にひきつづいて、「第3章 資本と利潤」が執筆されたと主張されている。内田氏は、「第3章 資本と利潤」が1861年12月に書かれたという大村泉氏の見解⁴⁾をみとめられながら（2ページ）、他方で1862年3月に書かれた「分業論」から、つぎに「第3章 資本と利潤」へというシェーマをくりかえされるのである。以下のごとくである。

「分業論を執筆しているとき（1862年3月）」（5ページ）。

「分業論が書かれた時期（1862年3月）」（9ページ）。

「「b. 分業」を執筆後「γ 機械…」にさしかかったとき、……「γ 機械…」に入るまえに、「第3章 資本と」利潤に旋回していったのである」（15ページ）。

「分業論のあと機械論にさしかかったとき、まず前者を解明すべく「第3章 資本と利潤」

1) 拙稿「『剰余価値学説史』と『機械論草稿』」、『経済』1983年10月号、以下「吉田第1論文」とよぶ。拙稿「ふたたび『機械論草稿』について」、『経済』1984年5月号、以下「吉田第2論文」とよぶ。

2) 私の論文の独訳と、それにたいする新MEGA編集者の見解は、以下のものであり、その邦訳は、拙稿「新MEGA編集者をたずねて」、『経済』1985年10月号、に掲載されている。Fumikazu Yoshida, Wurden Marx' „Theorien über den Mehrwert“ nach der Unterbrechung seiner Arbeit an dem „Maschinerie-Manuskript“ geschrieben? J. Jürgen Jungnickel, Bemerkungen zum Artikel von Fumikazu Yoshida, Beiträge zur Marx-Engels-Forschung, Heft 16, 1984.

3) 内田弘「機械論から剰余価値学説史へ——『1861-63年草稿』機械論草稿「連続執筆」説批判——」、『専修大学社会科学研究所月報』No. 249. 1984年4月20日。なお私がこれに接しえたのは1984年9月末である。

4) 大村泉「生産価格と『資本論』第三部の基本論理」（上・中・完）、『経済』1983年3月号、4月号、5月号。

と「雑録」をかいて」(27ページ)。

さらに内田氏は、「分業論」の末尾では、「多くの諸資本の自由競争を「引きあいに出すことはいっさいさげなければならない」(MEGA. II-3. 1, S. 286.) としていた」(14ページ) とのべ、この方法的限定が「第3章 資本と利潤」の「雑録」では解かれていると再三強調されているのである(16, 25ページ)。「第3章 資本と利潤」が1861年12月起筆であり、「分業論」が1862年3月というのであれば、「分業論」から「第3章 資本と利潤」へという執筆順序を主張することは、いうまでもなく不可能である。

あらためて確認するまでもなく、各種草稿類の執筆順序の問題は、草稿執筆時期が確定されてはじめて解決されるべき問題である。ところが内田氏はこれを逆転させて、「分業論」から「第3章 資本と利潤」へという執筆順序に固執されたため、「時間と空間」をこえたシェーマをつくり出されることになったのである。したがって、「分業論」から「第3章 資本と利潤」へというシェーマにもとづいて全てを立論されている内田氏の主張は、土台からして成立しえないのである。

II. マルクス『テヒノロジー史抜粋ノート』 と『1861—1863年草稿』ノート V—192 ページの〔 〕内記述をめぐる問題

内田氏は、マルクスが1862年3月に『テヒノロジー史抜粋ノート』を読んでいた可能性があるとし、その根拠として、この時期にマルクスがユアやバビジの抜粋ノートや原書を読みかえしていることを指摘されている(4-6ページ)。しかしながら、『テヒノロジー史抜粋ノート』と、ユアとバビジの抜粋ノートとは別々のノートであることをまず確認しなければならない⁵⁾。内田氏は、マルクスの1863年1月28日付

のエンゲルスあて手紙に示されている『テヒノロジー史抜粋ノート』(die technologisch-historischen Exzerpte)が、「ロンドン抜粋ノート」(全24冊)の中の1冊, Heft (ノート) XV であること、これを意識的にか無意識的にか明確にされていない。そのため、「ロンドン・ノート」Heft XVII (3ページ, 正しくはHeft XV), 「ポッペの『テヒノロジー史抜粋ノート』」(5, 17ページ, このノートはポッペ以外にも抜粋している), 「『テヒノロジー史抜粋ノート』がふくまれている「ロンドン・ノート」」(6ページ, 傍点は内田氏)などと不正確な記述を行なわれている。ここに基本的な資料についての、内田氏の理解が示されているのである⁶⁾。

つぎに内田氏は、さきの1863年1月28日付手紙に示されている「テヒノロジーに関する僕のノート(抜粋)を全部読みかえした(habe…… ganz nachgelesen)」につきかくいわれる。

「手紙でいう nachlesen とは、落穂拾い(Nachlese)を連想させる動詞である。すなわちマルクスはこの手紙を書いた時(1863年1月28日)より前にすでに、テヒノロジーの抜粋ノートを必要に応じて読み取り草稿作成に利用してきたが、いま改めてその残りを全部読み返したことを、その語法(ganz nachlesen)は示唆しているのである」(4-5ページ)。

まずここで問題となっているのは、「habe…… ganz nachgelesen」全体をどう理解すべきかであって、nachlesen のみであれば、「採り残しを集める」という意味もあるが、「habe…… ganz nachgelesen」は、「全部通して読み直す」という意味、つまり「はじめてから最後まで読み直す」ということは、ドイツ語を解するも

5) 拙稿「マルクス『テヒノロジー史抜粋ノート』を調査して」、北海道大学『経済学研究』第35巻第2号、1985年9月、参照。

6) 内田氏自身も、その論文「中期マルクスのリカード研究」、『専修経済学論集』第17巻第3号、1983年3月、43ページにおいて、「ロンドン・ノート」が24冊の別々のノートからなり、そのうちのXVが「技術学」にかんするノートであるとのべられていた。

のにとって自明であろう。このことは、同じ手紙に、「Das Wiederdurchlesen der technologisch-historischen Exzerpte」⁷⁾、つまり『テヒノロジー史抜粋ノート』を「読みかえた」とあることから明らかである。

ところで内田氏は、ノート V-192ページに示された [] 内の記述につき、マルクスが1851年に抜粋したノートの内容を記憶していたという「第2の可能性」をも主張される。内田氏はその根拠として、ノート V-192ページでは、『テヒノロジー史抜粋ノート』の記述から一部「不正確」に要約されているが、ノート XIX-1166ページでは抜粋ノートのまゝ引用されているとされる(8-9ページ)。

前拙稿で明らかにしたごとく、マルクスの『テヒノロジー史抜粋ノート』のオリジナルの調査によれば、ノート V-192ページと、ノート XIX-1166ページの記述は、『テヒノロジー史抜粋ノート』の13ページ48~49行目にもとづくものである。以下のごとくである。

。『テヒノロジー史抜粋ノート』13ページ48~49行目

In Frankreich wendeten die Müller fast stets es horizontal an, das mithin kein lebendiges Gefälle hatte, oder keine senkrechte Höhe von der schiefen Fläche an bis zur Horizontalfläche gerechnet. Bis zur Mitte des 18^{ten} Jh. keine eigne Theorie über das Gerinne.

。『1861-1863年草稿』ノート V-192ページ
[höchst charakteristisch, nebenbei bemerkt, daß die Franzosen das Wasser im Lauf des 18^{ten} Jhdt. horizontal wirken liessen, die Deutschen stets es künstlich brachen]⁸⁾

。『1861-1863年草稿』ノート XIX-1166ページ
In Frankreich wendeten es die Müller fast stets horizontal an, das mithin kein lebendiges Gefälle hatte, oder keine senkrechte Höhe von der schiefen Ebene bis zur Horizontalfläche gerechnet. Bis zur Mitte des 18. Jh. keine eigne Theorie über das Gerinne.⁹⁾

上記3つの部分を比較して気づくのは、ノート V-192ページの記述が、『抜粋ノート』13ページの要約的記述であり、XIX-1166ページの記述は、『抜粋ノート』13ページのそのままに近いが、「es」、「Ebene」と強調部分の一部が異なっており、内田氏の所説とはちがって、「ポッペの文を直接、原文のまま」(3ページ)使用しているというわけではない点である。したがって、「不正確」という点ではノート V-192ページの記述もノート XIX-1166ページの記述も五十歩百歩であって、ノート V-192ページの記述の「不正確」さをもって、そのみが記憶にもとづくものであると断定することはできないであろう。

ここでむしろ注目すべきは、『1861-1863年草稿』のノート XIX-1166ページのみならずその前のノート XIX-1162ページ以降における記述も、『抜粋ノート』の同じ見開きの、12-13ページにもとづいていることであり、いいかえれば、ノート V-192ページとノート XIX-1162ページ以降の記述の基礎となっている『抜粋ノート』のページが同じ見開き部分にあるということである(ノート V-219ページがノート XIX-1159ページにつづく)。このことは、ノート V-190ページからはじまる『機械論草稿』冒頭部分が、「中断」なく、それ以降の部分に書きつけられたことを示す1つの傍証となるであろう。

かくて内田氏のごとく、資料上の混同を行なったり、マルクスを無類の記憶力の保持者にしないかぎり、1863年1月以前に、マルクスが『テ

7) Marx Engels Werke. Bd. 30. S. 321.

8) Karl Marx, Friedrich Engels: Gesamtausgabe. (MEGA). II. 3. 1. S. 295.

9) MEGA. II. 3. 6. S. 1923~S. 1924.

ヒノロジー史抜粋ノート』を「読み返した」という「第1の可能性」も、1851年に抜粋したノートの内容をそのまま1862年になっても記憶していたという「第2の可能性」も立証できないのである。

なお内田氏はノート V-192ページの〔 〕内の記述につき、新 MEGA 編集者「によるマルクスの草稿の読み方、編集の仕方に種々の問題がある」(4ページ)ので、「〔 〕中の文に関する注記がないということは、機械論草稿の執筆順序を推定するさいの判断材料に入れることはできないのである」(4ページ)とされる。問題の〔 〕内の記述については、その一部の「つねに (stets)」という部分にたいして、「あとから書き加えられている」という「異文」がつけられている¹⁰⁾。したがって、〔 〕内の残りの部分について、「あとから書き加えられて」いないことになる。また、〔 〕の位置については、行間へのそう入ではないことを、オリジナルのフォトコピーによって確認できる¹¹⁾。それゆえ、〔 〕内の記述が「あとから書き加えられたもの」ではないことを前提して検討しなければならないのである。このように、内田氏は私の立論が不確かなものであるかのようにされているが、内田氏の主張自身が憶測にもとづくもののなのである。

III. 『剰余価値学説史』(ノート XIII—718)

における、「協業、分業、機械」への言及について

内田氏は、マルクスが「『剰余価値学説史』以前に機械論を執筆したと自ら言明している」(7

ページ)として、『剰余価値学説史』のノート XIII—718ページのつぎの記述をかかげられる(6—7ページ)。

「われわれが生産過程のところすでにみたように (Wir haben beim Produktionsproceß gesehen), 資本主義的生産の全努力は、労働時間の延長によってであろうと、必要労働時間の短縮によってであろうと、〔すなわち〕労働の生産力の発展や、協業や分業や機械などの充用 (Anwendung von Coöperation, Theilung der Arbeit, Maschinerie etc), 要するに大規模生産、したがって大量生産によってであろうと、できるだけ多くの剰余労働を独占し、したがって与えられた資本をもってできるだけ多くの直接的な労働時間を物質化する、ということに向けられている」¹²⁾。

ここで内田氏が証明すべき命題は、「マルクスは、1862年3月に「γ. 機械」前半を書いていた」である。しかし、上述の引用部分ではまず、「われわれが生産過程のところすでにみたように」(傍点は引用者)となっており、「書いたように」とはなっていない。また、「協業や分業や機械などの充用」とのべているのみで、これでは「γ. 機械」を全部執筆したともいえることになる。

なによりも留意すべきはつぎの点である。すなわち、マルクスは、項目5に『剰余価値学説史』を予定していたため、それ以前にくる項目については、実際に「記述」していなくとも、その項目を前提にした記述になっているということである。このことは、たとえば、『剰余価値学説史』「リカードゥ学派の解体」(ノート XIV—850 aページ)のつぎの部分にみられる。

「資本の把握における W〔ウェイクフィールド〕の独自の功績は、「剰余価値の資本への転化」に関する前のほうの部分で明らかにされている。ここでは、ただ、直接「論題」に

10) MEGA. II. 3. Apparat. S. 2495. 訳『資本論草稿集』④、大月書店、1978年、516～518ページ。

11) 今回、当該個所のオリジナルのフォトコピーに接する機会をもったが、それから判断するかぎりでは、字体(ペン)の太さ、1ページの行数、行の右あがり、などからみて、「中断説」の指摘するノート V-211ページとその前後には顕著な変化は見いだせない(ノート V-211ページのフォトコピーは、MEGA. II. 3. 6. S. 1897をみよ)。

12) MEGA. II. 3. 3. S. 1143. 訳『資本論草稿集』⑥、731ページ。

関係のあることだけにしておこう」¹³⁾。

ここに「剰余価値の資本への転化」とは「蓄積論」であるが、これは『剰余価値学説史』以前に執筆されていない。にもかかわらず、マルクスは、『剰余価値学説史』において、さきのような、「蓄積論」を前提した記述を行なっているのである¹⁴⁾。このような箇所は、他にも見いだされる。したがって、『剰余価値学説史』のさきの記述は、マルクスがそれ以前に「γ. 機械」項を執筆したという立証にはなりえないのである。

なお内田氏は、さきの記述と、「γ. 機械」ノート V-193~194ページとの対応を指摘されているが（7ページ）、『剰余価値学説史』との前後関係の判断材料にはなりえないであろう。なぜならば、『剰余価値学説史』より前に、ノート V-193~194ページが書かれたとしても、また逆に後に書かれたとしても、さきの対応関係を見いだしうるからである。やはり執筆順序の確定には、当該草稿の執筆時期を直接・間接に立証する、手紙・諸ノート類・草稿の状態・筆勢などの検討がなによりもまず第1に行なわれなければならないのである。

IV. 「die erste Bearbeitung」とは何か？

マルクスの1863年1月28日付のエンゲルスあて手紙にしるされている「die erste Bearbei-

tung」とは何か。「中断説」が立証しなければならないのは、マルクスが1862年3月に、「γ. 機械」項前半を執筆していたという命題である。

「die erste Bearbeitung」という文言それ自体は、これを立証するものではない。ここでもまず第1に草稿執筆時期（日付）の確定がなされなければならない。

さて、マルクスの使用した「die erste Bearbeitung」とは、用語の原義¹⁵⁾を考慮すると、「最初の取り扱い」、「最初の研究」あるいは「最初の編集」、「最初の編成」となるであろう。そして、この問題はすでに論じたごとく、「γ. 機械」の項を1863年1月に起筆するまでにいたっていた構想をふくめた「取り扱い」全体と考えられる。内田氏は「構想」という点をとらえて、「文献上確かめることのできない」（8ページ）と批判されるが、大野節夫氏¹⁶⁾が検討されているように、『剰余価値学説史』をへた1862年12月のプラン（ノート XVIII, 「第1編、資本の生産過程」のプラン）における「γ. 機械」の位置づけ、構想、編成という可能性が十分ありうるのである。いずれにしても、「die erste Bearbeitung」という文言それ自体は、1862年3月に「γ. 機械」項を執筆していたという証明にはなりえないのである。

V. 内田氏による「連続説」の検討について

私は、『剰余価値学説史』が『機械論草稿』に全体として先行するとの主張を、第1論文では、①ノート V-192ページにおけるポッペの利用、②『機械論草稿』の内容上の連続性、にもとづいて行なった。さらに第2論文では、考証上の問題に限定して、①ノート V-192ページ

13) MEGA. II. 3. 4. S. 1367. 訳『資本論草稿集』⑦, 280ページ。

14) 大野節夫「1861-63年草稿」と経済学批判体系プラン(下)、『経済』1984年8月号, 211ページ参照。なお、大野節夫「『経済学批判』から『資本論』へ」、『経済』1985年8月号, 213-214ページをも参照。大野氏は、この論文で、『1861-1863年草稿』の、ノート V-176 ページ以降と、ノート III-123a~h ページ、そしてノート XVIII-1142~1144ページの、各々3つの箇所における、固有な引用文献の相関を検討されて、これらの部分が同じ時期の1862年12月から1863年1月にかけて執筆されたと推定され、それを1つの根拠として、ノート V-176 ページにおいて、『剰余価値学説史』への「中断」がなされたと論定されている。

15) J. Grimm und W. Grimm, *Deutsches Wörterbuch*, Bd. I. 1854. S. 1207. R. Klappenbach und W. Steinitz hrsg., *Wörterbuch der Deutschen Gegenwartssprache*, Bd. I. 1978. S. 441- S. 442.

16) 大野節夫「1861-63年草稿」と経済学批判体系プラン(上)、『経済』1984年7月号, 227ページ。

におけるポッペの利用, ②ノート IV-166ページならびにノート V-175ページと, マルクスの1862年3月6日付のエンゲルスあて手紙との対応を根拠とした。

したがって, 第2論文では第1論文で②にあげた『機械論草稿』の内容上の連続性については根拠としていない。これはまず, 考証上の問題を明確にして, これを前提としてはじめてつぎに内容上の検討が可能となると考えるにいたったからである。

ところが内田氏は主に第1論文のみを検討されて, 拙論を批判されている。しかも, 内田氏は, 拙論が「上記の8点を『学説史』をくぐりぬけることによってはじめて獲得した論点であるかのごとくみなしている¹⁷が, そうではない」(11ページ)と批判される。

私は第1論文で, さきの論拠を2点あげ, それを受けて, 「つぎに『剰余価値学説史』の成果は, 『機械論草稿』全体にどのように反映されているかが問題となる」(190ページ)とのべているのみであって, 8つの論点が「はじめて獲得」されたとはどこにもものべていない。したがって, 内田氏は私の主張を歪曲され, その「虚像」にたいして批判を行なわれている。それゆえ, 7つの項目にたいする氏の検討・批判は, 問題設定からしてはじめから成り立たないのである。

なおまた内田氏は, 私の第2論文の第2論拠についてこう批判される。

「吉田氏はこの文には A. スミスの名がないことをもって, 上記の1862年3月6日付のエンゲルスあての手紙との結びつきを否定するが, それだけでは論拠薄弱といわざるをえない。その手紙は機械論ノート V-191ページのユアと十分に結びつきうる」(6ページ)。

拙論は分業論の2カ所において, ユアとスミスへの同時言及があり, これがマルクスの1862年3月6日付手紙と内容上対応すること, さらにこの手紙に示されている, 質問①「gigs」, ②「feeders on circular frames」は, 1862年

2月11日発行の『工場, 1861年4月24日付, 下院の指示にもとづいて提出された報告』の調査項目にあり, 他の質問③「マニユファクチュアの基礎をなしましたA・スミスによって描かれているような分業は, 機械制作業場には存在しない, ということ——この命題そのものはすでにユアによって詳述されている——を示すために, 僕の本のために1つの例が必要」¹⁷⁾とあわせてみて, マルクスが1862年3月当時, 「工場労働者編成=分業」の研究資料としたと推定しておいた(第2論文, 269ページ)。以上の点につき内田氏はなんら検討されることなく, 「論拠薄弱」とされるのである。どちらが「論拠薄弱」なのであろうか?

VI. 個々の論点について

個々の論点についての内田氏の批判も, 私の主張を正確にふまえられたものではない。たとえば, 内田氏は, 「吉田氏は「前半」と「後半」との間に「約9カ月にもわたる『中断』があったとするのはいかにも不自然である。」といっているが, なぜ「不自然」なのだろうか」(10ページ)とされる。しかし私は「労働〔時間〕の濃縮」という論点についてそれがノート V-201ページと, ノート V-217ページにわたって連続的に検討されている点についてさきのようにのべているのであって(第1論文, 183ページ),

17) MEW. Bd. 30. S. 223-S. 224. 訳『マルクス・エンゲルス全集』第30巻, 183ページ。大野氏は, この質問③が, ノート V-175ページにおけるユアからのつぎの引用に直接対応するとされる。「A・スミスが経済学の諸原理にかんする彼の不朽の著作を書いた当時は, 工業の自動体系はまだほとんど知られていなかった。分業がマニユファクチュアの完成の主要原理だと彼に思われたのは当然であった。……しかし, スミス博士の時代には有益な実例となりえたものも, 今日では, 現代の工業の実際の原理について誤らせることに役立つだけであろう。……」(MEGA. II. 3.1. S. 273. 訳『資本論草稿集』④, 482-483ページ)。大野節夫『「経済学批判」から『資本論』へ』, 『経済』1985年8月号, 221ページ。

内田氏の主張されるように、全論文にわたり私がこのべたわけではない。

①機械による労働日の延長

第1論文で私は、「絶対的剰余価値」,「第3章 資本と利潤」,「雑録」における「機械による労働日の延長」を分析して、「雑録」(1862年1月～3月)においてはじめて「新しい発明による社会的摩損に起因する「不変資本の減価」を根拠として、労働日延長を理論的に分析する試みがおこなわれている」(191ページ)とのべた。ところが内田氏は、拙論が「この時期(1863年1月下旬)から、「機械による労働日の延長」の問題を本格的に解明しはじめた、というのである」(13ページ)と要約されている。

事實は明らかであろう。

また、内田氏は『機械論草稿』における技術学的分析がノート XIX-1159ページ以降ではじめられていることをもって、マルクスの1863年1月24日、28日付手紙との対応を考え、『剰余価値学説史』から『機械論草稿』後半へと主張されている(13ページ)。しかしながら、これも『機械論草稿』に「中断」があったとする前提で成り立つ議論であって、さきの手紙との対応を考えると「中断」があったとするならば、その個所は「中断説」のいうノート V-211ページではなくて、技術学的分析がはじまるノート XIX-1159ページからとしなければならなくなるのである。

②機械と商品価値

拙論(第1論文)は、「雑録」の「労働過程と価値増殖過程：使用価値と交換価値」を分析して、固定資本の価値増殖過程への部分的そう入という問題が、「機械の充用による諸商品の低廉化のための巨大なテコの1つ」であり、かつこれが「利潤率の減少の根拠」であるという点につき言及し(193ページ)、『剰余価値学説史』をへて『機械論草稿』冒頭での規定にいたる理論的「跳躍点」を明らかにしている。ところが内

田氏は、これにはふれず、『剰余価値学説史』での論点は『経済学批判要綱』で把握されていると主張されるのみである(13ページ)。

③特別剰余価値

「分業論」から「第3章 資本と利潤」へという内田氏のシェーマが成り立ちえない点については、すでに冒頭で明らかにした。内田氏は、「吉田氏は、マルクスがなぜ「b 分業」から「第3章 資本と利潤」に巡回していったのか、そのわけがわからず、後者の中ではじめて機械導入の動機として特別剰余価値概念を明確にするという問題意識をいだくにいたったという」(15ページ、傍点は引用者)などと、「b. 分業」から「第3章 資本と利潤」という氏のシェーマにもとづいて私見を再三論難されるのである。

私は、「第3章 資本と利潤」ではじめて特別剰余価値概念を明確にする問題意識をいだくにいたったとはのべていない。私は第1論文で、先行する「相対的剰余価値」における特別剰余価値に関する記述を分析し、その意義と限界を明らかにしている(194～195ページ)。「第3章 資本と利潤」においては、個別資本→特別剰余価値追求と、社会的総資本→相対的剰余価値追求(→利潤率低下)の動きが逆になる関係が明確にされ、「相対的剰余価値」での特別剰余価値と相対的剰余価値を二者択一の関係におく議論が克服されていたのである¹⁸⁾。したがって、特別剰余価値の問題は、分業論の末尾における「1つの資本」への限定からときはなされて、「やっとここ「雑録」の2番目の断片にいたって解かれる」(15ページ)といったものではないのである。

なおまた内田氏はこうものべられている。
「競争の契機を入れて、なぜ個別資本家が機械

18) MEGA. II. 3. 5. S. 1659 ff, 訳『資本論草稿集』

⑧, 184ページ以降。大村泉「相対的剰余価値と特別剰余価値」 北海学園大学『経済論集』第32巻第1号, 1984年, 55ページ参照。

充用による個別的な労働生産性の上昇をきそうのかを説明するきっかけは、すでに「第3章 資本と利潤」の「6 生産費」(30ページ)で与えられている、と。しかしこの部分(「資本家が商品をとえその価値以下であっても利潤をとまって、売ることができる…」)は、特別剰余価値をのべたものではなく、「生産価格」の問題にふれたものなのである。

④自然力と機械

「自然力と機械」の問題について、内田氏は「この問題は、『学説史』ではじめてマルクスが触発された問題ではない」(16ページ)とのべている。私も「学説史」ではじめてマルクスが触発された」とはのべていないし、ましてやこれを『剰余価値学説史』先行の論拠としたことはない。「資本の支配力」と「労働の置き換え」についても同様である。

⑤「機械による単純協業の置き換え」

内田氏は、「機械による単純協業の置き換え」について、「1859年プラン草案」における「γ 機械」で論じるべく予定されていた10点のうち(i), (ix)などで示されている」(18ページ)とのべられる。(i)とは「機械充用の前提としての協業」であり、(ix)とは「機械による労働の置き換え」である。ここで留意すべきは、マルクスが『機械論草稿』冒頭の第4項目として、「機械による単純協業の置き換え」(傍点は引用者)と定式化している点である。さきの(i), (ix)とは異なり、しかも、『剰余価値学説史』における「草刈り機や脱穀機や播種機はおそらく自作農民にとって代わった」¹⁹⁾をうけて、「機械による単純協業の置き換え」という第4項目をたてて、「多くの人手を同時に働かせることを必要とする草刈りや播種、等々のような作業が播種機や草刈り機にとってかわる」²⁰⁾

とのべているのである。こうした点について、内田氏は看過して拙論を批判されるのである。

VII. プルードン問題について

内田氏は、私の批判が内田氏と田添京二氏の見解を同一視し、内田氏のプルードンへの言及が「生産過程の結果論と結びつくかぎりでのプルードンと規定して」(20ページ)いることを看過しているとされる。そして、内田氏の旧稿²¹⁾の以下の記述をかかげられる。

「マルクスが『剰余価値学説史』を書きはじめたプラン上の位置である。その場所とは、『プラン草案』に読める「三 相対的剰余価値」の最末尾の「諸商品の価値。プルードン。(IV, 26-32)」の直前である」。

まず第1に指摘すべきは、この記述は、『剰余価値学説史』が書きはじめられた場所を、「プルードン」の直前としている点である。しかし、ロシア語版『マルクス・エンゲルス全集』第2版第47巻、新MEGA第Ⅱ部第3巻はともに、「プルードン」への言及の直後(ノートV-211ページ)から、『剰余価値学説史』が書きはじめられたとしている。したがって、「MEGAの編集者による機械論草稿の区分が正しい」(8ページ)とする内田氏の所説と新MEGA編集者のそれとは正確には異なることになる。

第2に内田氏の所説は、『機械論草稿』のいわゆる「中断」についての先行業績であるB. C. ヴィゴツキー²²⁾やロシア語『マルクス・エンゲルス全集』第2版第47巻²³⁾の所説を前提にし、それらの所説の「推定」にたいして独自の「説

21) 内田弘「『資本論』成立史における『直接的生産過程の諸結果』」、『専修経済学論集』第10巻第2号、1976年、91ページ。

22) B. C. Выгодский, Место «Теорий прибавочной Стоимости» в экономическом наследии Карла Маркса. (Издательство ВПШ и АОН при ЦК КПСС) Москва, 1963. стр. 18.

23) К. Маркс и Ф. Энгельс, Сочинения. Том. 47. 1973. стр. 624.

19) MEGA. II. 3. 3. S. 1174, 訳『資本論草稿集』⑥、778ページ、傍点は引用者。

20) MEGA. II. 3. 1. S. 312, 訳『資本論草稿集』④、545ページ、傍点は引用者。

明」²⁴⁾を与えられようとしたものであって、いわゆる「中断」個所についての「証明」を行なわれたものではないという点である。以上のような意味において、内田氏のブルードンについての言及は、いわゆる「中断」個所について「証明」を与えられたものとはみなされないであろう。

さて内田説は、「1859年プラン」の「三. 相対的剰余価値」が「諸商品の価格。ブルードン」を含んでいるから、「商品資本論」として総括される²⁵⁾とする、などのにわかに理解しがたい見解を含んでいる。しかし、いまかりに内田氏のごとく、「1859年プラン」の「商品資本論」(ブルードン批判)が「1863年プラン」の「7. 生産過程の結果」に移されているとすると²⁶⁾、問題の記述の冒頭「商品の価格と労賃。ブルードンのたわごとについては別のところでのべることにする」²⁷⁾は、まさに、「1863年プラン」(正確には「1862年12月プラン」)での変更をうけての叙述であるとしなければならないであろう。

ところが内田氏は、さきの「商品の価格と労賃。ブルードン……」につき、「プラン上の位置の変化」(25ページ)とまとめられながら、この部分が「1863年プラン」に先だつ1862年3月に書かれたとされるために深刻な矛盾におちいることになる。内田氏は一方で「1863年プラン」(「1862年12月プラン」)でブルードン批判が「7. 生産過程の結果」に移された「決定的なモメントは多くの諸資本の契機の導入である」(=「第3章 資本と利潤」, 28ページ)としながら、他方でその「諸資本の契機」を捨象していた分業論と同じ時期(1862年3月)に、すでに

「プラン上の位置の変化」が生じていたとされるのである(25ページ)。そこで内田氏は、「変化の可能性は、すでにこの分業論の終りで、結果論を社会的分業=交換との関連で展開したときにははさまれた」(25ページ)などとされるが、かかる説明では自家撞着を糊塗することはできないであろう。こうした事態となったのは、内田氏が資料考証上の諸事実を無視して、自らのシェーマに固執されたためである。

なお内田氏は、「1863年プラン草案」の「γ機械」の「終り」でなく、「途中」でブルードンになぜ言及したのか。この疑問に吉田氏は答えなければならない(21ページ)とされる。内田氏もみとめられるように、マルクスは、「γ. 機械」にいたる以前のいくつかの個所において部分的にブルードンに言及している。したがって、「γ. 機械」の途中において本格的な言及ではなく、ブルードンについて、「1859年プラン」の「諸商品の価格。ブルードン」との関係を念頭において、「1863年プラン」(「1862年12月プラン」)での位置づけの変更について言及することは決して不思議ではないであろう。

いずれにしても、このブルードンの問題は草稿執筆時期の確定的な証拠たりえない。なぜなら、それを直接に証明するものはなにも示していないからである。

む す び

本稿を終えるにあたって改めて痛感されるのは、『資本論』形成史研究の課題と方法のありかたである。『資本論』形成史の基本線について、様々な見解がうち出され、学問的な討論・研究が深められていくことは大いに歓迎されるべき事態である。しかし、『資本論』形成史研究が社会科学研究の一部をなす以上、その前提をなす諸資料(諸草稿、手紙、伝記類など)についての独自の批判的な検討が不可欠である。そして、『資本論』形成史がマルクスの理論の歴史的発展、展開を対象とするかぎり、諸資料の

24) 内田氏のこうした「説明」にたいして、「中断」を前提した立場から当然、批判が生まれている。西村弘「マルクス利潤論の生成——『要綱』から『学説史』へ——」, 専修大学大学院『経済と法』第8号, 1977年, 239ページ。

25) 内田弘, 前掲論文, 107ページ。

26) 内田氏は「1863年プラン」(「1862年12月プラン」)を1863年12月としていた。前掲論文, 113ページ。

27) MEGA. II. 3. 1. S. 317. 訳『資本論草稿集』④, 555ページ。

作成時期のできるかぎり正確な推定・確定は、『資本論』形成史研究の大前提をなす。諸草稿の執筆順序や「中断」などの問題も、ここから論理必然的に導き出されるのであって、逆の関係ではない。

本稿はもともと内田氏の拙論批判への回答として執筆されたものであるが、その後内田氏自身はその見解を修正された。すなわち、内田氏は新著『中期マルクスの経済学批判』（有斐閣、1985年4月刊、330、335-6ページ）において、本稿が対象とした氏の論文の一部を訂正され、『1861-1863年草稿』の執筆順序につき、相対的剰余価値の概念 → 「第3章 資本と利潤」 → 「a. 協業」 → 「b. 分業」 → 「γ. 機械」（前半） → 「剰余価値に関する諸学説」 → 「γ. 機械」（後半）と変更された。「b. 分業」から「第3章 資本と利潤」へという氏の主張を撤回されたわけである。しかしなお「訂正」の理由は不明確であり、「訂正」の内容も不徹底であるようにおもわれる。たとえば、新著においても、さきの論文を「論証」として参照指示されており（282、335ページ）、さきのシェーマにもとづく拙論への論難は「訂正」されず、「第3章 資本と利潤」における競争の「導入」から「捨象」への、氏の所説の変更理由は示されず、全体として氏のシェーマとそれと結びつ

いた執筆順序は依然として変わっていないようにおもわれる。全面的な再検討を期待したい。

（1984年10月脱稿）

（1985年8月一部加筆）

〔付 記〕

誤解のないよう一言しておきたい。本文・注記において、大野節夫氏の見解を紹介するところがあったが、私見と必ずしも同一ではない。筆者は「b. 分業」（末尾） → 『剰余価値学説史』 → 「γ. 機械」という執筆順序であると考えものである。その根拠は、「b. 分業」の末尾、ノート V—188ページに引用されている『工場監督官報告書。1861年10月31日にいたる半年間』（1862年2月～3月）にたいして、マルクスが、「最近（neuerdings）、漂白業者と染色業者が、工場法に従うことに抵抗して、同じことを主張している」（MEGA. II. 3. 1. S. 290、誤④ 509ページ）とのべているところにある、ここから、ノート V—188ページは1862年2月～3月ごろ執筆されたと推定される。したがって、「b. 分業」（末尾） → 『剰余価値学説史』（1862年3月以降） → 「γ. 機械」となる。詳細は別稿を期す。